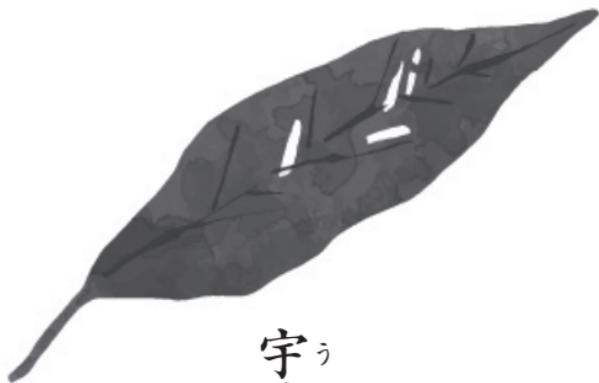


病葉わくらばの記



宇津木うづき

勉つとむ

この手記を、別れた三人の息子達に捧げる。

もくじ

協議離婚	リハビリ	交通事故	まえがき
40	22	6	4



## まえがき

昭和五十九年十月、四〇才のときに交通事故を起こす。

入院治療三週目に脳卒中を併発、橋きょうという脳の奥の危険な患部だったこともあって、回頭手術を断念。

その後、精密検査、リハビリと転院を重ねて加療に励み、約一年後に退院となる。

しかし、身体障害者となつて、日常の生活も不自由となり、働くことさえままならず、収入も見込めなくなったので離婚を決意。

その当時、九才、七才、四才と三人の息子がいたが、断腸の思いで別れる。

以後、施設暮らしに甘んじながら今日に至るも、家族とは離別以降は音信も途絶え、せめて“ざんげの記録”でも残そうと、ペンを走らせた次第である。

以上



## 交通事故

昭和五十九年十月某日（土曜日）

霧雨きりさめが、三〇分ほど前に止んだ高速道を、ワゴン車が駆かけていた。

助手席に専務が座り、四〇歳と五カ月目を迎えた私がハンドルを操作して、会社のある仙台市を目指し、順調に帰途に就ついていた。

カーラジオからは、今、流は行やってるイーグルスのホテル・カリフォルニアの歌が流れている。

軽快なテンポのリズムと、乾かわいたドラムの響ひびきが、けだるい疲労感を癒いしてくれている。

明日は日曜日ということもあって、車内は超ちゆうリラックスモード。

宮城県の北部に点在する、古川市の町の明かりが見えてきたのは、午前〇時

に近かった。

二人が乗っていた車は、車道の左側、つまり走行車線を走っていたのだが、突然、追い越し車線を猛スピードで疾走する、幌ほろをつけた大型トラックがいた。そのトラックが、数メートル前方でウインカーを点滅させると、ひよっこり走行車線に、侵入してきやがったのである。

「あつ、バカ、危ない……!!」

咄嗟とっさにブレーキペダルを踏んだ。

だが、これが良くなかった。

雨上がりの車道は濡ぬれていて、タイヤはスリップし、車輛をコントロールできなかったのだ。

「ぶ、ぶつかるー!」

ワゴン車は、中央分離帯めがけて突っ込んでった。

翌朝、人の気配で目が覚めた。

だらしなく、ベッドに寝かされた状態だった。

頭と首は、身動きがとれぬよう、ムチ打ち患者がつけてるみたいなの、コルセツトでしっかりと固定されている。

看護師が、点滴の交換に来てたので、

「今、何時ごろですか？」

「もう少しで、八時半になるところよ」

その会話で、わが魂が戻ったことを察知した三つつの顔が、真上から覗き込んできた。

妻の心配そうな表情もあった。

昨夜のうちに、会社からことの一報を受け、今朝になって三人の息子達を実家に預けてから、急ぎ病院にやって来たらしい。

「どうやら、意識が回復したようだな。痛むところはなかなかな！」

院長先生が声をかけてきた。

「あっちこっちに痛みを感じます」

「かなりの打撲だったせいだろう。しかしなんだ、レントゲンでも骨折は見られないから。一カ月ぐらいで退院できんじゃないかな」

じつと成行なりゆきを注視ちゆししていた専務に、

「せ、専務、大丈夫だったんですか？」

一番気がかりだったことを、恐る恐る聞いてみた。

「俺は、軽い打撲ですんだので、安心していい」

最も憂慮ゆうりよしていた専務の無事を知り、ホッとすると、急に眼瞼がんけんが重たくなってきた。

目を閉じると、事故の直前の様子が、フラッシュバックとなって蘇よみがえる。

中央分離帯を視界が捉とらえた刹那せつな、気を失ったみたいで、なんも覚えていないのだ。